

アドルノ教育論の社会心理学的基盤

— 自我形成をめぐる問題に焦点を当てて —

白 銀 夏 樹

はじめに

もしも心理学が人間の健全な発達のゴールとそのプロセスを提示することができれば、教育はその手段としてシステムティックに実践されるだけで事足りるのではないか——このように心理学と教育との関係を考えることも可能だろう。近代教育学を体系するために教育手段を理論化する知的基礎を心理学に求めたヘルバルトの教育学をはじめとして、子どもの健全な成長のプロセスやゴールのイメージを心理学に求めようとする教育観には枚挙に暇がなく、またそうした発想も教育学の観点からは自然なものに映る。だが、ドイツの思想家アドルノ (Theodor Wiesengrund Adorno) の教育論の場合は若干の様相が異なるように思われる。

アドルノはホルクハイマー (Max Horkheimer) との共著『啓蒙の弁証法 (Dialektik der Aufklärung)』(1947年) に代表される悲観的な現代社会批判でよく知られているが、そこにもフロイト (Sigmund Freud) の精神分析に基づく社会心理学的な知見が認められる。アドルノは研究生活のスタート以来フロイトに大きな関心を寄せ¹⁾、アメリカ亡命時代の『権威主義的パーソナリティ (The Authoritarian Personality)』(1950年) や帰国直後の『グループ実験 (Gruppenexperiment)』(1955年) といった大規模な共同研究でもリーダーシップをとり、とりわけ1940年代から50年代にかけて、フロイト的な社会心理学にかかわる論文を多く残していた。そこでは反ユダヤ主義に代表される偏見や暴力性といった社会的病理に焦点を当て、時にそれを「自我の弱体化」「脆弱な自我」と形容していた。

そしてアドルノの晩年の教育論にも社会心理学的な彼の知見が認められるのだが、その多くもやはり社会的病理に関わるものであった。アドルノの晩年の教育論は、死後公刊された教育論集『成人性への教育 (Erziehung zur Mündigkeit)』(1970年) で確認することができ²⁾、そこでは現代の教育の最も重要な教育目標が自律 (Autonomie) あるいは成人性 (Mündigkeit) として語られている。しかし実際に彼の教育論は社会的病理の指摘に大部分が割かれており、「自律ないし成人性をいかに実現するか」についての心理学的な言及は限られたものとなっている。たとえばもっとも有名な「アウシュ

ヴィッツ以後の教育 (Erziehung nach Auschwitz)』(1966年講演) では、アウシュヴィッツを繰り返さないことこそが現在の教育の筆頭の課題であるとアドルノは述べ、それを実現するための領域として「幼児期、とりわけその初期の教育」と「一般的な啓蒙」の二つがあるとする [GS 10-2, 677]。しかし前者については「深層心理学の知見によれば、幼児期初期においてすでにその後の悪行の性格が形成されるため、[アウシュヴィッツの：引用者注、以下同様] 繰り返しを避けようとする教育は、幼児期初期に集中して行われなければなりません」と述べているが [GS 10-2, 676]、この講演の議論はアウシュヴィッツの再来の温床と言える社会的なメカニズムの意識化という「一般的な啓蒙」の方にもっぱら重点が置かれている。彼の依拠する精神分析から「脆弱な自我」ではない「強靱な自我」の形成について論じることも可能であったにもかかわらず、それに関するアドルノの発言は「アウシュヴィッツ以後の教育」に限らず断片的なものにとどまっている。

本論ではアドルノの教育論とそこで参照されるアドルノ自身の心理学的研究をもとに、まずはアドルノの社会心理学的批判を確認したうえで、断片的なアドルノの言及からアドルノの自我形成観を再構成する。続いてその自我形成観が、アドルノの思想全体から見てアポリアを含むことなどを示す。それによってアドルノの思想には、彼自身の教育論にとどまらない人間形成観があることを確認してみたい。

1. 「過去の克服とは何か」における社会心理学的な批判と教育観

「過去の克服とは何か (Was bedeutet: Aufarbeitung der Vergangenheit)」は最初に1959年にキリスト教・ユダヤ教共同会議 (Koordinierungsrat für Christlich-Jüdische Zusammenarbeit) で講演され、同年に『教育者会議報告書 (Bericht über die Erzieherkonferenz)』に掲載されたが、1962年にドイツ社会主義学生同盟 (Sozialistischer Deutscher Studentenbund) で再び講演された後に論文集『介入——九つの批判モデル (Eingriff. Neun kritische Modelle)』(1963年) に収録された³⁾。この講演は、当時の暗黙の「ナチスドイツがも

はや克服された」という知的雰囲気への批判を念頭に置いたものであり、『成人性への教育』に収録されたこれ以降の一連の教育論と共通するテーマを多く含んでいることだけでなく、他の教育論に比べても同時代の状況に対する社会心理学的な批判が多くみられることでも注目できる。この点に注意しながら、その概要をまずは確認しよう。

まずアドルノは、ヒトラーの時代は過去でありもはや克服されたという当時の知的雰囲気に対して、「克服」を語る資格があるのは被害者だけであると批判しつつ、この雰囲気をヒトラーの時代に対する罪責感からの無意識的・意識的な「防衛 (Abwehr)」であると述べる。ユダヤ人の追放や大量殺人に対する沈黙や婉曲的な表現、「ガス室で死んだのは600万人ではなく500万人に足らずだ」という強弁、「それを知らなかった」「私たちもヒトラーの圧政に苦しんだ」という弁明、あるいは大量殺人の原因はユダヤ人のほうにも「何らかの」きっかけがあったという根拠のない転嫁——アドルノはこうした一連の傾向を心理的な「防衛機制 (Abwehrmechanismen)」の結果として理解する [GS 10-2, 557]。ただしこれは「罪責コンプレックス (Schuldkomplex)」という精神病理学で理解される類の個人における半ば無意識的な心理に留まるものではなく、『啓蒙の弁証法』でアドルノとホルクハイマーが明らかにした「自我の弱体化」という社会的傾向として理解される [GS 10-2, 558]。「苦痛を伴う不快な想起 (Erinnerungen) を防衛する心理的機制は、現実適応的な目的に奉仕するものです」、そして「想起を消し去るというのは、圧倒的な無意識的プロセスに対する意識の弱さではなく、はっきりと覚醒した意識のなすことです」とアドルノは述べ [GS 10-2, 558]、その例として「外国からのドイツの評価を下げるかもしれない」といった憂慮、「民主主義はアメリカに強制されたものでドイツ人はそこまで成熟していない」という——こう語っている時点で政治的テーマとしての自覚はあるにもかかわらず——見解、回顧的なナチズムの美化、ヒトラーの施策の部分的肯定といった同時代の世論の傾向などを挙げていく。

こうした社会的傾向に対応する個人の性格を、アドルノはここでは『権威主義的パーソナリティ』の成果をふまえて「権威に縛られた諸性格 (autoritätsgebundene Charaktere)」と呼ぶ。それは「権力の有無への関心 (Macht-Ohnmacht)、頑迷で反応に乏しい、因習主義、大勢順応主義、自己省察の欠如などの経験能力の欠如」 [GS 10-2, 561] といった特徴を持つが、この性格はそもそも自我が脆弱であり、それを補うためにより大きな集団に同一化し擁護されることを求める。そして文明化によって充足が期待できなくなった個々人のナルシズムの欲動傾向 (Triebregungen) を代補的に充足し増長

させていたのが、かつてのナチズムであった。しかし戦後の知的雰囲気を見る限りでは、この同一化とナルシズムはヒトラー政権の崩壊によっては「清算 (fertigt)」されることはなく、戦後の経済の好況もあって変わらず存続している。しかし経済的好況もそのうち終わるといふ不安や、そもそも自らは社会の主体ではないという漠然とした不満をぬぐうことはできていないため、享樂への敵意や「国が何とかしてくれる」というあいまいな期待によって、自分の外にある集団や国家といった全体的なものへの人々の従属性はより高まっているとアドルノは述べる。この象徴といえるのがナショナリズムであり、主権国家という観念は国際化の時代にあってもはや時代遅れとなっているにもかかわらず、国際経済において利益共同体を結束させる政治的手段として今も用いられている。これに伴い、自分が欲しいものを他人が持っていると考える「投影 (Projektion)」から他人を迫害するパラノイ的な迫害妄想をはじめとして、サディズム的で破壊的な傾向がナチズムの時代の後も保持されているとアドルノは分析するのである。

それでは、このような社会的病理はどのように克服されるのか。アドルノはドイツで起こったことの教育と啓蒙によって忘却に抵抗することを求める。具体的には、戦後にアメリカ主導で実践されホルクハイマーらも関与した「再教育 (re-education)」的な民主的政治教育を推進するために、教師教育や大学での「私たち自身の時代の歴史研究と結びついた社会学」 [GS 10-2, 569] の強化、そして心理学者と教育学者の協働とともに [GS 10-2, 571]、精神分析に対する社会的承認が挙げられる。アドルノは集団への心理療法の実践は難しいとしながらも、その本質が「批判的な自己省察 (Selbstbesinnung)」にある精神分析が制度的に正当な位置を得ることで、「自分自身について反省し、さらに頑なな意識であれば憤激しがちなことに接しても、それと自分の関係を反省することが当たり前になる」ことを期待する [GS 10-2, 570]。それに対してユダヤ人を称賛するプロパガンダやユダヤ人との直接的な交流にはアドルノは期待を寄せていない。プロパガンダはそれ自体が全体主義の産物であり、またたとえばユダヤ人の称揚に成功したとしてもそれはイデオロギー (仮象) となって偏見それ自体は温存するからである⁴⁾。また生粋の反ユダヤ主義者は経験能力の欠如を特徴とするため、直接的な交流によって偏見が正されることもあまり期待できないともアドルノはいふ。最もアドルノが求めるのは「自分自身の中に原因がある人種的偏見のメカニズムを意識化する」 [GS 10-2, 571] ことである。「啓蒙としての過去の克服は、本質的にはこのような主体への転回であって、主体の自己意識と自己自身の強化なのです」 [GS 10-2, 571]。そして最後に、人々の心理との親和性が高いプロパガンダの心理

的技法に関する啓蒙を「予防接種 (Schutzimpfung)」[GS 10-2, 571] として行うことや、ファシズムの潜在性のデメリットを啓蒙することが必要だと述べてこの講演を終えている。

こうしたアドルノの論調は、彼の業績の大部分を占める美学や哲学あるいは社会学的な成果からすると、精神的な心理学に議論が偏っているように見える。とりわけ現状の批判に関しては、他の音楽批評を含めた現代文化や現代社会の批判に比して、その社会心理学的な分析が際立っている。それはアドルノなりの過去の「克服」のアイデアにおいて、精神分析がありべき教育と啓蒙のモデルとなっていることによるものだと考えられる。このアドルノの心理学への傾倒は、「主体への転回 (Wendung aufs Subjekt)」に要約されているといえよう⁵⁾。この言葉は「アウシュヴィッツ以後の教育」でも再び言及されており、ユダヤ人への迫害の「メカニズムの意識を広く喚起することで、再びそのように〔迫害を行うように〕なることを妨げるようにしなければなりません」と付け加えられている [GS 10-2, 676]。さらに、アドルノの最後のメッセージともいわれる最晩年のベッカー (Hellmut Becker) との対談「成人性への教育 (Erziehung zur Mündigkeit)」(1969年のラジオ対談)においても、この言葉は出ないものの、共通する問題意識を認めることができる。アドルノはこの対談の冒頭でカント (Immanuel Kant) の論文「啓蒙とは何か (Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung)」(1784年)の一節「啓蒙とは、人々が自分に責のある未成熟 (Unmündigkeit) から抜け出すことである」を引用しながら、自分自身の悟性 (Verstand) の欠如ではなく、他人の指導なしに悟性を使用する決意と勇気の欠如を「未成熟」と批判したカントの重要性を指摘し、啓蒙を自分自身の課題として引き受ける個人々の努力を求める [EzM 133]。アドルノはアウシュヴィッツ再来の可能性が個人々の内面に、無意識的なレベルにまで潜在しているとしたうえで、それを自己反省的に意識化し、自分の問題として引き受けることで、アウシュヴィッツ再来の危険を減じることができると考えていた。こうした論理構成のために、アドルノの教育論では精神分析が重要な役割を果たしていたといえる。

2. アドルノにおける社会心理学的な研究の経緯

「過去の克服とは何か」の背景にあるアドルノの社会心理学的な思想を確認する前に、アドルノにとって精神的な心理学がどのような位置にあったのか、その思想的な経緯において確認しておこう。

アドルノは20代の前半に大学教授資格論文として準備していた「超越論的霊魂論における無意識の概念 (Der

Begriff des Unbewusstseins in der transzendentalen Seelenlehre)」(1927年ごろ)において、すでにフロイトの『精神分析入門 (Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse)』(1916-17年)を扱っており、フロイトの精神分析への関心を見せていた。だが音楽批評家への道の模索とその挫折を経て1931年のフランクフルト大学私講師就任、ナチによる教授資格の剥奪からイギリスそしてアメリカへの亡命という1930年代の変転の中にあって、アドルノの著作における精神分析やフロイトへの言及は断片的なものだった。ただしフランクフルト社会研究所の機関誌『社会研究誌 (Zeitschrift für Sozialforschung)』に寄稿されたいくつかの論文、あるいは社会研究所のリーダーであったホルクハイマーへの書簡には、フロイトの精神分析に依拠した考察が散見される。とりわけ社会研究所において精神分析の専門家の位置を占めていたフロム (Erich Fromm) に対する批判をホルクハイマーに書き送ったいくつかの書簡からは、フロイト的な精神分析を社会批判へと拡張する自らの手法に対してアドルノが相当の自信を持っていたことがうかがえる [白銀 2014]。そして1938年にニューヨークに移り、すでにアメリカに移っていた社会研究所の正式な所員になった1940年頃からは、社会研究所の反ユダヤ主義研究に積極的に関与するようになった。

社会研究所はそのフランクフルトでの設立当初から哲学・社会学・経済学・歴史学そして心理学の総合的な研究を企図しており、大規模な共同研究である『権威と家族に関する研究 (Studien über Autorität und Familie)』(1936年)に代表されるナチズム分析などを行っていた。しかしアメリカへの亡命後、研究所の資金の窮乏、心理学のリーダーであったフロムの研究所からの離脱、国家資本主義をめぐる研究所内の見解の相違などを経る中で、反ユダヤ主義に焦点を当てた研究に本格的に取り組む始める。1939年にホルクハイマーが準備し1941年に『社会研究誌』の後継である『哲学社会科学研究 (Studies in Philosophy and Social Science)』誌に掲載された「反ユダヤ主義調査プロジェクト (Research Project on Antisemitism)」のアイデアは、幾度も修正を経て、1943年になってアメリカユダヤ人委員会 (America Jewish Committee) やユダヤ人労働者委員会 (Jewish Labor Committee) からの資金援助を可能にした。反ユダヤ主義研究は1940年代の社会研究所の主要なテーマとなり、いくつかの派生的な研究を生みながら、その成果は1950年と51年に出版された「偏見の研究 (Studies in Prejudice)」シリーズに結実した⁶⁾。

この1940年代の社会研究所の活動においてアドルノが果たした役割は大きい。1939年からホルクハイマーと個人的に執筆を進めていた『啓蒙の弁証法』とは別に、1940年には「反ユダヤ主義調査プロジェクト」の構想を

受けてホルクハイマーに送られたメモ「ナチズムと反ユダヤ主義 (Nationalsozialismus und Antisemitismus)」[AHB II, 539 ff.]をはじめ、アドルノはいくつもの反ユダヤ主義研究のアイデアをホルクハイマーに示していた。そして1944年のアメリカユダヤ人委員会の資金援助決定から同委員会内にホルクハイマーを長とする科学調査部が設置された際 [AHB III, 495 ff.]、アドルノはホルクハイマーと並ぶ心理学的研究のリーダーとして [HGS 12, 168]⁷⁾、カリフォルニア大学の「バークレー世論研究 (Berkeley Public Opinion Study)」グループとの心理学的共同研究を担うこととなった [AHB II, 623 ff.]。またユダヤ人労働者委員会 (Jewish Labor Committee) の資金援助を受けた研究プロジェクト「アメリカ労働者間の反ユダヤ主義 (Antisemitism among American Labor)」へ指示を与えたほか⁸⁾、アメリカのファシスト・プロパガンダの言説、子どもや主婦の反ユダヤ主義、反ユダヤ主義の潜在的イメージ、間接的な反ユダヤ主義プロパガンダ、そしてユダヤ人向けの反ユダヤ主義対応マニュアルの作成など、研究所のメンバーやバークレー・グループとともに研究計画を作成し、そのいくつか実際に取り組んでいった。

その代表的な成果がアドルノとバークレー・グループのサンフォード (R. Nevitt Sanford)、フレンケル=ブルンスヴィク (Else Frenkel-Brunswik)⁹⁾、レヴィンソン (Daniel J. Levinson)、の共著で「偏見の研究」シリーズの第一巻となった共同研究『権威主義的パーソナリティ』であった。またこの時代の心理学的研究としては、研究所のメンバーであったレーヴェンタール (Leo Löwenthal) やマッシング (Paul W. Massing) と進めていた政治的プロパガンダ研究の成果である「マーティン・ルーサー・トーマスのラジオ演説の心理学的テクニック (The Psychological Technique of Martin Luther Thomas' Radio Addresses)」(1943年執筆、死後公刊)、「反ユダヤ主義とファシスト・プロパガンダ (Anti-Semitism and Fascist Propaganda)」(1946年、レーヴェンタールとマッシングとの共著)、「民主的リーダーシップと大衆操作 (Democratic Leadership and Mass Manipulation)」(1950年)、「フロイトの理論とファシスト・プロパガンダのパターン (Freudian Theory and the Pattern of Fascist Propaganda)」(1951年) が挙げられる。その他にもフロイト修正主義の批判などもすでに行っていたが¹⁰⁾、やはり反ユダヤ主義をめぐる社会心理学的な研究が当時のアドルノにとっては研究活動の大きな部分を占めていた。

1950年代初頭、フランクフルトとアメリカを往復しながらホルクハイマーを支えていた時期のアドルノは、社会研究所の復興とともに社会学的な共同研究に取り組んでいた [Demirović 1999]。個人としてもテレビやホロ

スコープの社会心理学的分析に取り組んでいたが¹¹⁾、この時期の社会学的共同研究において彼のフロイト的な社会心理学をうかがえるものとして、ポロック (Friedrich Pollock) を代表者として出版された『グループ実験 (Gruppenexperiment)』(1955年) が挙げられる。この研究はナチズムやユダヤ人の迫害の問題をめぐる戦後のドイツの人々の潜在的な意識を明らかにしようとする研究であり、またフロイトに依拠した社会心理学の手法を用いている点でも、アメリカ時代の問題意識を継承していたといえることができる。

その後は大規模な社会心理学的調査研究をアドルノがリードすることはほとんどなくなっていくのだが、1950年代は次の60年代に比べてもやはり社会心理学の理論的研究への強い関心がうかがえる。『権威主義的パーソナリティ』をはじめとするかつての自らの成果を参照しながら、「偏見と性格 (Vorurteil und Charakter)」(1952年、ホルクハイマーとの共著)、「政治と神経症に関する注釈 (Bemerkungen über Politik und Neurose)」(1954年)、「社会学と心理学の関係について (Zum Verhältnis von Soziologie und Psychologie)」(1955年)、「頑なさ と統合 (Starrheit und Integration)」(1959年)などを公にしていった。また1952年には「精神分析の実践について (Über die psychoanalytische Praxis)」という共同研究を構想し [AHB IV, 876 ff.]、またフロイト生誕百周年を記念したハイデルベルク大学とフランクフルト大学共同の連続講義の企画も行っていた [GS 20-2, 646 ff.]。

1960年代のアドルノは心理学を主題とした論文をほとんど残してはいないが、『否定弁証法 (Negative Dialektik)』(1963年) や『美の理論 (Ästhetische Theorie)』(1970年、遺稿) のような彼の主著にフロイトへの言及が散見されるのは周知のとおりである。アドルノの教育論を含め、こうした時期のアドルノの思想の背景には、1950年代までの心理学的な研究の成果があった。

3. 「グループ実験」における防衛機制の研究

講演「過去の克服とは何か」の主題のひとつは、ヒトラーの時代の出来事に対する罪責感を回避しようとする当時のドイツの人々の防衛機制であったが、これは1955年に出版された『グループ実験』の成果をふまえたものといえよう¹²⁾。この研究は1950年とその翌年にホルクハイマーとアドルノが主導した実験を元に行っている [Demirović 1999, 353 ff.]。この実験では様々な職種の人1635人の成人を対象として、民主主義やヒトラーの時代の問題、ユダヤ人への印象、当時の再軍備の動向、そして自国観などについて、のべ121回のディスカッションを行わせたものであり、そこから人々が普段は公然とは口にしない「非公式の世論 (nicht-öffentliche Meinung)」

を読み取ろうとするものであった [Perrin/ Olick 2011]。1955年に「フランクフルト社会学叢書 (Frankfurter Beiträge zur Soziologie)」シリーズの第二巻として出版されたこの本の第五章「罪責と防衛 (Schuld und Abwehr)」が、アドルノが単独で手がけたものである。

本書の「序文」によると¹³⁾、この研究においてフロイトの精神分析的な方法が用いられた理由は、『権威主義的パーソナリティ』とこの研究の連続性に立ち、個人々の精神力動 (Psychodynamik) から集団的な心理的現象を分析しようとしたこと、なによりも客観的な事実と矛盾した非合理的といえる被験者たちの反応に出会ったことによる。この非合理的な反応の解釈には、錯誤行為に対する精神分析と同様の方法が有効だと考えられ、「投影 (Projektion)、反動形成 (Reaktionsbildung)、抑圧された罪責感 (verdrängtes Schuldgefühl) という機制 (Mechanismen) はすべて自我による無意識の防衛の領域内に位置づく」 [GS 9-2, 136] という観点が導入された。すなわち、まず人々にはヒトラーの時代の出来事に対する潜在的な罪責経験のようなものがあり、この経験は「抑圧され合理化 (Rationalisierung) される」 [GS 9-2, 149]。ここで作動するのが防衛機制であり、「耐えられないほどの自分の無力感を乗り越える (hinwegkommen) ために」、自らの属する集団への過剰な「同一化 (Identifikation)」が行われる [GS 9-2, 150]。また自分の罪責を別のものに転嫁する投影も、「自らの欲動傾向、無意識的なもの、抑圧されたものの原因が、別のものに帰せられる」防衛機制によるものであり、これによって「超自我の要求に応えながら、正当な報いであるかのように自分の攻撃的傾向を他者にぶつける」ことが可能になる [GS 9-2, 232]。さらに、事実の断片をイデオロギー的に変形して繋ぎ合わせ、節度のない幻想に身を委ねる類の合理化もここでは認められる [GS 9-2, 209]。ただし、本質的に投影は合理化と密接に関係しているが、しかし合理化も様々であり、たとえば罪責を「解消して (ausmachen)」自分の負荷を軽減することも一種の合理化である [GS 9-2, 232]。そのため正しい合理化と危険な投影を区別することは困難だとされる。アドルノがこの調査の中でかろうじて希望を認めるのは、拒絶であれ何であれ防衛的な被験者たちの見せる熱の籠った反応であった。その熱は当時の出来事が「不正である」と被験者たち自身が認めていることの証しだとアドルノは述べる。「防衛それ自体が、人々の経験したショックの刻印であり、そこに希望の視点が開かれる」 [GS 9-2, 150]。

ところで、この研究の意義については、調査や出版の時点では、ドイツの理論的伝統と外国の経験的研究の融合や社会学者の養成といったことが念頭に置かれており [GS 9-2, 127 f.]、この研究の啓蒙的・政治的な意図につ

いては本文中ではほとんど述べられていない。アドルノに関していえば、「特にこの研究が提供しているのは、ディスカッションの参加者たち自身が『ドイツ・ノイローゼ』と名付けたものの現象学的手法であり、これはこの「ノイローゼ」の構造に沿って認識され、意識に高められるときに、はじめて治癒される」という箇所にも認められる程度である [GS 9-2, 146]。

この啓蒙的・政治的な意義は、むしろこの研究の出版後の反響の中で浮き彫りになった。いくつかの書評においては、この研究の方法とかかわって「非公式の世論」の客観性などが議論される一方で、「精神分析の最も重要な発見のひとつは、患者が病の原因を認識すれば (einsehen) その症状は消えるというものであったが、フランクフルトの実験は、こうした治療的な功績を果たすことができるかもしれない」といったアドルノらへ理解を示す評価もあった [Demirović 1999, 364]。そして1957年には『ケルン社会学・社会心理学誌 (Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie)』において、心理学者ホフシュテッター (Peter R. Hofstätter) による『グループ実験』への批判とそれに対するアドルノの反批判が掲載された。いわゆるホフシュテッター—アドルノ論争である。ホフシュテッターの批判は、特にアドルノの「罪責と防衛」に対して、精神分析を「暴露 (Entlarven)」的に用いている点に向けられていた。アドルノの精神分析的な批判は罪責感を個人々に過度に強要するものだとホフシュテッターは批判し、むしろ何らかの贖罪的な儀式による罪責感の払拭の方が必要ではないかと論じた。それに対してアドルノは、ホフシュテッターの批判が「集団的ナルシズムに訴えるものにほかならない」と断じる [GS 9-2, 391]。ホフシュテッターは今生きているドイツの人々の背負う罪責感の重さを懸念するが、「望んでいたわけでもないのに、アウシュヴィッツの出来事を背負わなければならなかった犠牲者たち」 [GS 9-2, 392] をどう考えるのか、また贖罪的な儀式の効果に期待できないことは心理学者ならば知っておいて当然だ——「絞首刑吏の家では縄の話をするべきではない、ルサンチマンを抱いていると思われるからだ」 [GS 9-2, 392] という「過去の克服とは何か」でも取り上げられる痛切な皮肉とともに¹⁴⁾、間断なく繰り返されるアドルノの批判は苛烈を極める。アドルノ自身が認めるこの研究の意義としては、先に触れた「ドイツ・ノイローゼ」の認識による治癒に言及した部分を再び引用しながら、「否定的なものを確かめ言葉にすることで、この否定的なものを変えられねばならない」 [GS 9-2, 392] と述べている点に集約されている。その背後には、アドルノが犠牲者の側に立ち、その代弁者であるかのように、ホフシュテッターを、ひいては今も生きるドイツの人々を批判する視点があつた。この視点はたとえば「過

去の克服とは何か」の次の一節にも継承されている。「虐殺された人々へ無力な私たちが唯一捧げることができるもの、それは記憶（Gedächtnis）である」[GS 10-2, 557]。

4. 権威主義的なパーソナリティの問題

「過去の克服とは何か」の背景となる研究として前節では『グループ実験』の「罪責と防衛」に注目したが、この研究はナチの時代の責を帰せられる当時の成人を対象とするものだった。だが「過去の克服とは何か」に限らず、晩年のアドルノの教育論は、この時代の責を直接負ってはいない子どもを対象とした議論である。ここでナチの時代に生きた成人の防衛機制の問題をアドルノがあえて取り上げているその理由は、ひとつには単に大人の影響を子どもが受けやすい点にあることも確かであろう。他方で「ドイツ人として生まれた以上、先祖の責は引き受けねばならない」という観点は、少なくともアドルノの教育論には登場しない¹⁵⁾。

むしろアドルノの念頭にあったのは、親の世代であれ子の世代であれ、ナチの時代であれそれ以後の時代であれ、こうした防衛機制に象徴される心理が根本的には現代の社会的病理だということであった。アドルノにとっては、その病理の発現形態が、たとえば哲学や社会学においては存在論に代表される同一的思考の専制、芸術や大衆文化においては文化産業、政治的言説においてはプロパガンダであり、個人の性格においては権威主義に代表されるパーソナリティであった。このパーソナリティの分析に焦点を当てた彼自身の研究成果が『権威主義的パーソナリティ』であった。

著者であるアドルノとバークレー・グループの人々は、反ユダヤ主義の研究を進める中で、この現象を二つの側面から理解できるとする。ひとつは反ユダヤ主義をより包括的なイデオロギーの枠組みのひとつとしてとらえるアプローチであり、もうひとつは、個人の心理的欲求（needs）を基礎としたイデオロギーからの影響の受けやすさ（susceptibility）としてとらえるアプローチである [GS 9-1, 151]。そしてこの研究は後者のアプローチをとり、反ユダヤ主義に限らない広い意味でのイデオロギーを射程に入れ、それに影響を受けやすいパーソナリティを問題とするものであった。「私たちが関心を主に向けたのは、反民主主義的なプロパガンダに対して特に影響を受けやすい精神構造を備えた、潜在的ファシズムの個人であった」[GS 9-1, 149：下線部はアドルノらによる強調]。

まずアドルノらがパーソナリティ形成を理解するために前提としていた精神力動論（psychodynamics）を、この著作の言葉に依拠しながら確認しておこう¹⁶⁾。アド

ルノらはまずパーソナリティを欲動（drives）、願望（wishes）、感情的衝動（emotional impulses）などの基本的な欲求の組織体とみる。個人の原初的な欲求は、外的環境の影響を受けながら、外的環境とは相対的に独立したものとして発達とともに構造化され、個人の行動を規定する内的な準備態勢（readiness）としてのパーソナリティの力となる [GS 9-1, 154 ff.]。この構造化に際しては、エディプス・コンプレックスをはじめとする心理的な葛藤（conflict）が不可避なのだが、その解決のために形成されるのが自我（ego）である。自我は「自己と外的世界との関係、そして自己とパーソナリティの深層に潜むものとの関係を統治する（govern）」[GS 9-1, 201] ものであり、「超自我による過度の罰を招かない充足を認めることで衝動を調整（regulation）したり、あるいは一般には現実の要求との一致をはかることで、個人の活動性を実現しようとする」[GS 9-1, 201]。そして「自我の機能は良心と和解（make peace）することであるが、それは良心と感情的衝動と自己を調和させるような大きな総合（synthesis）を自らの内部で創造するためにである」[GS 9-1, 201]。それに対して、「良心のような内的な権威の発達の失敗」[GS 9-1, 198]あるいは「超自我の内面化（internalization）における失敗」[GS 9-1, 201 f.]によって、この総合が成し遂げられないことが、自我の脆弱さ（weakness）ないし無能力（inability）として理解されるのである。

こうした精神力動論からアドルノらは「潜在的ファシズム」のパーソナリティを測定するために、この著作を有名にしたファシズム尺度（Fascism Scale：以下「F尺度」）を開発した¹⁷⁾。F尺度は次の9つの変数で構成されているが、いずれの変数もそれぞれ独立した性格ではなく、ひとつのパーソナリティ構造を理解するための変数として位置づけられる。その概要は次の通りである [GS 9-1, 229 ff.]。

- ① 因習主義（conventionalism）：因習的な価値への絶対的な固執（adherence）。
- ② 権威主義的従属（authoritarian submission）：理想化され道徳的に権威づけられた内集団への従属的・無批判的態度。権威への敵意と反抗的衝動が恐怖によって抑制（check）された結果、権威への極端な尊敬・服従・感謝を示す。権威へのアンビバレントな感情の処理として理解される。
- ③ 権威主義的攻撃（authoritarian aggression）：因習的な価値を侵す人々を探し求め、非難・拒絶・処罰しようとする傾向性。権威主義的従属がマゾヒスティックなのに対してこちらはサディスティックではあるが、構造的には類似している。基礎的な快樂の断念を強制されシステムの抑圧を被り続けた結果、情緒的な生活

が制限されやすく、そのため無意識ないし自我の外部にとどまっている衝動（特に性衝動と攻撃衝動）が強化される。この衝動は自らを不安にする対象を攻撃性のはけ口とし、さらにこの攻撃が権威や集団によって正当化された際には一層の暴力性を伴う。これによって、内集団の権威に対する潜在的な敵意が外集団に向かうという転移（displacement）や¹⁸⁾、あるいは権威主義者において、自らが受容できない自分自身の衝動を外部の人々に向ける投影（projection）も可能になる。

- ④反反省性（anti-intracception）：主観性、豊かな想像、繊細な心情といったものの敵視。自分の情動が規制できなくなることへの恐怖が、心情そのものへの敵意となる。人間の内面性の一切を排除し、人間も物も同じように冷酷に操作すべき対象とみなす冷酷な態度にもつながる。
- ⑤迷信とステレオタイプ（superstition and stereotypy）：個人の運命に対する神秘的な決定要因を信じる迷信は、外的な諸力の克服という観念を放棄し、自分の責任を外的な力に転嫁することとして理解される。ステレオタイプとは硬直した概念で物事を理解する一種の鈍感さであるが、潜在的な不安によって、心理的・社会的な事柄への説明が困難になった結果と理解される。いずれもパーソナリティ内の深層の諸力を自我に統合（integration）できないために、外的世界にそれを投影した結果とされる [GS 9-1, 205]。
- ⑥権力とタフネス（power and “toughness”）：人間関係などにおいて「強い—弱い」「支配—従属」「指導者—追従者」といった権力的動機を過度に重視する。その心理の深層には権力欲求と服従欲求が共存する権力コンプレックス（power complex）がある。
- ⑦破壊性とシニシズム（destructiveness and cynicism）：人間的なもの一般への敵意と誹謗。反民主主義的な人間の深層にある強い攻撃的衝動が、特定の対象にそれを向ける権威主義的攻撃とは異なり、攻撃性そのものの正当化や人類への軽蔑につながっている。
- ⑧投影性（projectivity）：世界には野蛮で危険なものが横行していると信じる性向。無意識の欲動を外界へ投影し、自我の外部にとどめている状態であり、それが強くなるほどに無意識の性的で破壊的な衝動も強化される。権威主義だけでなく「この世界は邪悪な勢力に支配されている」といった先入観などにも認められる。
- ⑨性（sex）：性的「行為」への極端な関心。自我の外部にとどめられた性的衝動として理解される。

以上のように、F尺度の低得点は基本的に自我の脆弱さとして理解される。たとえば因習主義と権威主義は、

一貫性と耐性を備えた道徳的価値の傾向性（set）を自我において形成することができなかった結果、外部の力への依存や良心の外在化として位置づけられる。つまり根底において同様のパーソナリティ構造の表現と理解され、また他の「迷信とステレオタイプ」などの変数についても自我の脆弱さの直接的な兆候とみなされるのである。

アドルノ個人の著した第19章「類型と症候群」でもこの観点は継承されている。この章では調査の高得点者と低得点者に見出されるパーソナリティの類型が列挙されているが、この類型化自体、一種のステレオタイプといえるかもしれない。しかしアドルノは特に高得点者を想定しながら「私たちが生きる世界はすでに類型化されており、この世界が様々な人格の『類型』を『産出（produce）』するのである」と述べ [GS 9-1, 459]、すでに社会が個人のパーソナリティを典型的なものにしているだけでなく、その類型化の力に対して挑戦（challenge）するためにも、研究としてもあえて類型化を避けないのだとしている。またこの類型は、その「心理的な葛藤とその解決の基本的な形式」から演繹的に導き出されるため [GS 9-1, 461]、症候群のみならず葛藤の解決に成功したものも挙げられている。こちらについても精神力動的にその概要を見てみよう。

<高得点者に見出される症候群・類型>

- ①表面的なルサンチマン（surface resentment）：ステレオタイプに依拠して自分の社会的不安を（似非）合理化している。積極的なファシストの偏向は認められず、いわゆるスケープゴート理論で読み解くこともできる。敗者としての前意識的な罪責からの解放を、勝者である（と彼らが信じる）ユダヤ人を排撃する反ユダヤ主義に求め、欲求充足を果たそうとする。
- ②「因習的」症候群（the >>conventional<< syndrome）：内集団と外集団の区別を重視し、偏見やステレオタイプは内集団への同一化の手段にすぎない。表面的には暴力的ではないが、伝統的なパターンを外れた他人には不快感を覚え、そこから生まれる葛藤によって敵意が強化される。
- ③「権威主義的」症候群（the >>authoritarian<< syndrome）：権威への盲信と弱者への攻撃的なレディネスの共存であり、かつて『権威と家族に関する研究』の中でフロムが提唱した「サド=マゾヒズムの性格」に相当する。外的な社会的抑圧と内的な衝動の抑圧の共存という『権威と家族に関する研究』でホルクハイマーが提唱した観点から、権威とその心理的審級である超自我への服従と従属に快楽を覚えることで、社会的コントロールの内面化すなわち社会的適応を達成しようとするものと位置づけられる。その心理の発生メ

カニズムは「古典的な精神分析のパターン」[GS 9-1, 475]から理解され、すなわち発達初期のエディプス・コンプレックスにおいて父親への憎悪が反動形成を経て愛に転換されることができず、攻撃性がマゾヒズムとサディズムに分配されたものとみなされる。マゾヒズムは統合されず外的なものに留まる超自我ないし権威への非合理的なまでの同一化を可能にし、またサディズムはその同一化の埒外のものへの非合理的な攻撃をも可能にする。ここで大きな役割を果たすのが内集団／外集団あるいは反ユダヤ主義といったステレオタイプであり、それがリビドー・エネルギーを方向づけ調整するエコノミ的機能を担うことによって、肛門期的発達段階への退行ともいえる強迫性を助長する。

- ④ 反抗とサイコパス (the rebel and the psychopath) : 基本的には権威主義的なパーソナリティ構造を備えているが、権威への依存が無意識レベルでの否定的な転移によって、あらゆる権威に対する非合理的で盲目的な憎悪として発現したのが「反抗」であり——反抗は潜在的には「投降」という権威への従属のレディネスも備えている——、その極端なケースが精神医学でサイコパス (精神病) とされる「タフガイ (tough guy)」である。特にサイコパスは超自我形成と自我形成に失敗したため非常に幼く、自我同一性を欠き、刹那的であり、その暴力性は偏見をも必要としない。
- ⑤ 奇人 (the crank) : 社会的適応の失敗などのフラストレーションを抱えているために、外的世界を暴力的に拒絶しながら妄想的な内的世界を形成し強化する。このパラノイア (偏執症) を助けるのが偏見であり、それによって形成された仮想現実を裏付けようとしてセクトを作る傾向がある。
- ⑥ 「操作的」類型 (the >>manipulative<< type) : 他者への感情的なつながりが欠落し、いわば内的世界と外的世界が分裂している点でスキゾフレニー (統合失調症) 的だが、ステレオタイプに従って物事を道具として扱うこと自体——いわば手段それ自体を目的視する——に欲動エネルギーが備給されており、ナルシズム、シニシズム、他者への冷酷な知性を背景とした管理と操作への執心の特徴とする。感情の欠落を補うために忠誠の道徳性を偏重することや性への没頭も特徴として挙げられる。

<低得点者に見出される症候群・類型>

- ①「硬直的」低得点者 (the >>rigid<< low scorer) : マイノリティの権利運動のような進歩的な考えを持っているが、その信奉の背後にはステレオタイプの思考の硬直性やその全体主義的な方向性があり、「表面的ナルサンチマン」に類似している。強い超自我と強迫性

を特徴とする。父親の権威がしばしばフロイトの言う「兄弟の群族 (brother horde)」のような集合性によって代替されている。

- ②「抗議的」低得点者 (the >>protesting<< low scorer) : 「権威主義的」症候群と同様、エディプス・コンプレックスの特殊な解決パターンとして理解される。父親の権威への敵意を極度に内面化し止揚した結果、自律的な良心に基づいて他律的な権威の全てを強迫的・神経症的に拒否するようになったと考えられる。自信に乏しく罪責感を抱えており、時にその罪責感を人間全体に一般化したり、マイノリティをステレオタイプの捉え強い同情を示すが、その良心に基づく強い正義感 は行為に結びつき難い。
- ③「衝動的」低得点者 (the >>impulsive<< low scorer) : 強いイド (エス) の衝動が超自我と自我に統合されていないため、奇人や「操作的」症候群などにいくらか似ている。ただし破壊的衝動からは比較的自由で、むしろ抑圧されたものへのリビドー的な同情が強い。また新しい欲求充足を与えてくれる期待から、異質なものの強い関心を示す。ただし超自我と自我の脆弱さが、思考の概念化や政治的態度の不安定さにも通じている。
- ④「気楽」な低得点者 (the >>easy-going<< low scorer) : イドが抑圧されておらず、共感へと昇華されており、超自我もよく発達している。ただし、いわゆる自我の外向化機能 (extraverted functions) だけが伴っていないため、神経症的な優柔不断に陥ったり他人を傷つけることへの不安を抱えることがある。おおむね内面が安定し、ステレオタイプのでなく、攻撃性もない。「操作的」類型とは反対に柔軟でオープンな心の豊かさを見せ、時に幼い印象を与えるが、これは自我の脆弱さというよりも自我の物象化 (reification) を可能にする外傷 (trauma) 経験などがそもそもなかったと考えられる。
- ⑤真のリベラル (the genuine liberal) : フロイトが理想とした超自我・自我・イドのバランスが取れている。「衝動的」類型と同様に強いイドを持っているが、進んでその傾向を自覚しており、道徳的な勇気や他人を主体視した愛となっている。自我もよく発達しており、「抗議的」類型と同じくマイノリティへの同情に厚いが強迫的ではなく、また「気楽」な類型と同じく反権威主義的だが、より意識的で躊躇を伴わない。

以上のように、アドルノがここで描いている類型は、精神力動論の観点から自我形成が成功し、超自我・自我・イドのバランスが達成されたか否かが鍵となっている。「権威主義」「反抗とサイコパス」「抗議」の類型については、アドルノ自身が直接的に述べているように、

発達初期のエディプス・コンプレックスが適切に解決されなかった帰結である。また「操作的」類型も、「権威主義」と「肛門期的性格」を共有しながらも過剰なナルシズムや他者への感情の欠落を伴っているものとして、発達初期の問題を認めることができる。さらに「因習的」類型については、伝統的な家父長的家族構造において葛藤のないままに父親と社会の規範を内面化した結果ということが出来る [ジェイ1975, 355-356]。

『権威主義的パーソナリティ』の成果を自ら振り返り要約したアドルノとホルクハイマーの共著論文「偏見と性格 (Vorurteil und Charakter)」(1952年)も見てみよう。ここでは主に高得点者たちに確認できる権威志向を指しながら、「全体主義的性格類型 (totalitäre Charaktertype)」という言葉が用いられている [GS 9-2, 367]。権威への服従を本質とするこの類型は根本的に自我が脆弱であり、責任回避と内集団への同調、ステレオタイプ的な思考、そして無意識的な破壊の欲望と外集団へのその転化などによってその特徴が形容されている。またこの論文で興味深いことは、『権威主義的パーソナリティ』の特色のひとつとして、この類型の原因を幼児期に見出した点にあると、彼ら自身が認めていることである。強い父親や愛情の欠如によって幼児期に傷つけられた人は、自分が蒙った事柄を今度は自分から他者に向けて行おうとするため、他人と関係を結ぼうとせず、感情も希薄なままである。一見すると正常であるゆえにその傷は深く、自分や所属集団の利害を超えたことには無力な自分自身の自我の脆弱さの虜となっているとアドルノとホルクハイマーは述べている [GS 9-2, 369]。

それでは、こうした問題あるパーソナリティを改めたり未然に防ぐことへの展望は、どのように描かれるだろうか。『権威主義的パーソナリティ』全体の「結論」は著者としてアドルノの名が挙がっていない部分であるが¹⁹⁾、それによればたとえば合理的な議論や同情に訴えることでは、パーソナリティそのものではなく部分的な徴候への処方箋にしすぎないため、その効果にはあまり期待できない。まず必要なのは、「適切な影響が早期に与えられる」ような「子どもの訓育 (training)」であると考えられるが、より重要なのは「子どもが心から愛され一個の人間として扱われること」だとされる [AP, 975]。ただし、たとえば自集団中心主義的な親は子どもにもそうした態度をとるであろうし、そうでなくとも子どもが社会で過ごせるようにと願うあまり型にはめる (mould) 親も多いため、根本的な解決のためには、社会の変化そのものが求められる。具体的な方途としては、ファシストの潜在力を変革したり抑制したりすることとして、社会学と心理学に基づいた知とともに、「自分自身を見つめ、自分自身である能力が増大しなければならない」 [AP, 975]。そのためには、人々を操作

(manipulation) する心理的技法 (device) を駆使するのではなく、自分を見つめ社会を見つめることを妨げる心理的な「盲目性」を克服することが重要であり、そのためには集団へのサイコセラピーに類したものが必要だとされる。

他方、「偏見と性格」では、人間を教導したり (belehren) 別の信念を与えることではなく、深層レベルでの教育プロセスによって、人間や事物に対する自発的で生き生きとした関係を得るような能力、いわば「生き生きとした経験をする能力」を「形成あるいは再確立する」ことが必要であるとされる [GS 9-2, 369]。あわせて『権威主義的パーソナリティ』のような研究は、人々に対する自己省察を目覚めさせ、また全体主義的性格の弱点を示すものでもあるため、効果的な対抗手段を可能にし、また「幼児期初期に対する包括的な教育プランのために有益なものになりうる」と述べられている [GS 9-2, 373]。

『権威主義的パーソナリティ』には教育的含意を伴う提言がいくつか見られるのに対して、「偏見と性格」にはそれが乏しいことが、ここから見て取れるだろう。特に『権威主義的パーソナリティ』では「自分自身である能力」という言葉が、「自我の強靱さ」を連想させることには留意しておきたい。F尺度の変数やアドルノのいう症候群が自我の脆弱さ——この言葉は『権威主義的パーソナリティ』では類出し、またアドルノの「過去の克服とは何か」でも登場していた——に帰結するものである以上、「自我の強靱さ」あるいは「強靱な自我」は、教育の目標として掲げるに適當なものと思われそうである。アドルノ自身はこの言葉を『権威主義的パーソナリティ』でほとんど用いておらず²⁰⁾、むしろ共同研究者のフレンケル＝ブルンスヴィクのほうが積極的に論じていた。彼女の議論とアドルノの思想の関係について続いて考察してみたい。

5. 「強靱な自我」

フレンケル＝ブルンスヴィクは、単に『権威主義的パーソナリティ』の共同執筆者のひとりにとどまらず、1940年代から50年代にかけて、アドルノの社会心理学的な研究に大きくかかわっていた。オーストリアからの亡命ユダヤ人であった彼女は、もともとビューラー (Karl Bühler) のもとで発達心理学を学んでおり、『権威主義的パーソナリティ』に至る共同研究では面接調査をリードし、『権威主義的パーソナリティ』の第二部「臨床的面接を通して明らかにされたパーソナリティ」の全体を執筆した²¹⁾。またドイツ帰還後にアメリカでの亡命時代を振り返った「アメリカにおける学問的経験 (Wissenschaftliche Erfahrungen in Amerika)」(1968年)

でも言及しているように、アドルノは彼女とともに「子ども研究 (Child Study)」を進めていた [GS 10-2, 625 ff. u. 730 f.]。この研究は、子どもの性格形成とユダヤ人に対する態度の関係を説明することを念頭に、1944年の末から構想されていた研究であり、小学校段階の子どもにおいて偏見の芽が形成されるのではないかといった仮説なども立てられていたが²²⁾、結局まとめられることはなかった。しかしそうしたアイデアは、彼女の執筆した『権威主義的パーソナリティ』の第二部には生かされていると思われる。

本書の第10章「面接を通して観察された親と幼年期」では、偏見的な被験者の成育歴の特徴として、家庭での厳しいしつけと忍耐や受容的態度の欠如、父親の過剰な厳格さ、子どもの側での恐怖感と親への表面的同調や依存などが認められる一方、偏見的ではない被験者には、愛情に基づく安定した両親との関係と、両親からの相対的な自立性との共存が認められるとしている。また第12章「面接を通して観察された力動的パーソナリティ組織と認知的パーソナリティ組織」では、面接調査の指針となる諸概念が列挙されており、口唇性／肛門性、依存性、攻撃性、アンビバレント、同一化、超自我といった概念とともに、「自我の強靱さ (strength of the ego)」が挙げられている [AP, 456-457]。偏見的ではない低得点者たちには、パーソナリティの統合、忍耐強さ、感情面での成熟、無意識を支配し昇華しようとする傾向、そして葛藤や不安を抱えながらも現実の問題を自覚しつつ柔軟に現実へ適応しようとする傾向が見出され、それらを以って「強靱な自我」と形容されている。それに対して高得点者たちは自らの本能的衝動を抵抗しがたくも邪悪なものにとらえる傾向にあり、それを抑圧しようとする結果、そのエネルギーが投影などによって無駄に消費されて自我が弱まり、時にそのエネルギーの暴発を招くことになるという。

こうしたフレンケル＝ブルンスヴィクの自我概念をアドルノもある程度共有していたことは間違いない。アドルノの教育論には、子どもの自我を強化するための提案として読むことができる箇所がいくつかある。たとえばベッカーとの対談「野蛮を脱するための教育 (Erziehung zur Entbarbarisierung)」(1968年)では、「いわゆる温室育ちの子ども、比較的早い段階で攻撃性の昇華のようなことに成功した子どもは、思春期を迎えても、また大人になっても、おそらくそのまま変わらないでしょう」 [EzM, 132] と述べる。またこの対談では、身体的暴力に対する嫌悪感 (Abscheu) ——この言葉は対談中のベッカーの指摘によって羞恥心 (Scham) と改められるが——を教育システムによって染み込ませる (durchtränken) ことを提案したり [EzM, 130]、怒り (Empörung) は野蛮の現れのひとつではあるが、野蛮

に対する怒りに限っては有意義だとも述べており [EzM, 123]、これらの発言は精神分析でいうところの広義の「昇華」に類するものといえるかもしれない。さらにアドルノの教育論において看過できないのは、権威に対するアンビバレントな態度である。「アウシュヴィッツ以後の教育」では、子どもの頃の禁圧が少ないほどよいという考えを「幻想」だとして、「生活の残酷さや厳しさを全く予期しなかった子どもは、保護された場所から解放されるやいなや野蛮に晒されます」と述べており [GS 10-2, 688]、単なる子どもの欲動の解放をアドルノが推奨していないことをうかがわせる。さらに「野蛮を脱するための教育」では、「権威主義的な態度を放棄し、頑迷で強固で外面化された超自我の形成を放棄する」ために、「幼児期初期の教育において、どんなものであれ不明瞭な権威を解体することが、野蛮を脱するために最も重要な前提です」としながらも、次のようにも述べている。「それ自体が暴力的な原理に基づいてはいない、盲目的ではない権威の現象もあります。それは意識的で、なにより子ども自身にとって見通すことができる契機を伴っています。その時点で、この権威の現象は〔不明瞭な権威とは〕別の意義を担うのです」 [EzM, 131]。そしてたとえば子どもがハエの羽を引きちぎった時に叱ることなどは肯定される。これはフレンケル＝ブルンスヴィクが『権威主義的パーソナリティ』において明らかにした、「しつけ」をめぐる調査結果を念頭に置いたものかもしれない。「面接を通して観察された親と幼年期」によると、「脅迫的・トラウマ的・圧倒的な、去勢不安を煽るしつけ (discipline)」と「同化可能 (assimilable) な、自我を破壊しないしつけ」の区分が面接調査の評定カテゴリーとして導入されていた。前者のしつけは、子どもの外にあるが子どもが服従しなければならぬ力であるのに対して、後者のしつけは、子どもの理解と協力を得ることで子どもの同化が可能になるようなものだと言われる。そして偏見的な人の傾向として、道徳的規則の違反を理由としたしつけを親から受け、そのしつけは残酷かつその意味が子どもにも理解できないもので、自我が破壊された結果、「サディスティックなタフネス」 [AP, 373] の根底に認められるような根源的な不安を持つに至った。それに対して偏見的ではない人の傾向として、理性的原理の違反を理由としたしつけを受けており、それは子どもにも納得できるものであるため、内面化された超自我の確立の条件になっているとみなされた。

さらにアドルノの「成人性への教育」には、こうした自我と権威の関係について、より踏み込んだ言及がある。アドルノは、生徒の時代に従順だった子どものほうがひねくれていた子どもよりも成長したときに自律し反抗的になるというフレンケル＝ブルンスヴィクの調査結

果があると述べたうえで²³⁾、次のように続けている。「フロイトはこれを正常な発達と呼んでいますが、子どもは〔発達〕プロセスとしてまず父親像 (Vaterfigur) というある権威と自己を同一化し、それを内面化し、それを我が物とします。続いてその子どもは、痛みを伴う、傷つくことなしには成立し得ないプロセスを経験します。それは、父親から学んだ自我理想 (Ich-Ideal) と実際の父親や父親像が一致しないために、そこから身を引き剥がすというプロセスです。このようにして子どもは成熟した人間へとなるのです」[EzM, 140]。権威それ自体を美化することも、反対に権威の概念の完全否定も戒めながら、「権威という契機は、成熟へのプロセスの発生的な契機として前提とされるのです」[EzM, 140] と述べるのである。

ここでのアドルノは、子どもにとって納得できるという意味での合理的で透明な権威に限っては是認し、また父親像のような内面化された権威から「身を引き剥がす」プロセスは正常なものだと認めているのである。このような意味でアドルノは「自我と自我形成 (Ich-Bildung) の一定の堅固さ (Festigkeit)」[EzM, 143] を要請していたと考えられる。フレンケル＝ブルンスヴィクは、偏見的でない人々は「自身の不安定さや葛藤を直視する能力が高い」ゆえに、過去のネガティブな自己イメージも、そして現在の不安や憂鬱についても率直に語るができることと述べているが [AP, 441]、アドルノのいう堅固な自我の要請は、こうした能力への期待も含まれていたと考えられる。

6. 自我形成をめぐるアポリア

以上のようにフレンケル＝ブルンスヴィクに依拠しつつアドルノの精神分析的自我形成観と教育論とを結びつける限り、アドルノの要請する「強靱な自我」の形成は、一般的な精神力動論からはほとんど逸脱していない穏当な教育学的帰結であるように思われる。しかし、教育論にとどまらず、アドルノの社会批判的な他の論稿を改めて参照するならば、そこでは現代社会における自我形成の困難さが描かれており、彼の教育論が非常に楽観的なものに見えてくる。

まずは自我形成の基盤となる家族への批判から確認しよう。家族それ自体の歴史性は、すでにホルクハイマーが『権威と家族に関する研究』において描いており、「かつて市民社会の全盛期では、家族と社会の間には豊かな相互作用が生まれており、父の権威がその社会的役割によって基礎づけられるとともに、権威への父権的教育の助けを借りることで社会は更新されていた。しかし今では、家族はそれ自体として不可欠なものではあるが、単なる統治技術の問題となる度合いを強めている」[HGS

3, 417] と述べていた。1955年に著されたアドルノの遺稿「家族の問題について (Zum Problem der Familie)」も、この認識を共有していたことをうかがわせる。アドルノはモース (Marcel Mauss) やレヴィ＝ストロース (Claude Lévy-Strauss) の家族論を挙げながら「家族とは科学的に実体視されてはならず、むしろ社会の力学 (Dynamik) に従っている」という観点から出発し [GS 20-1, 302]、近代市民社会において家族が社会的支配の内面化の代行者でありながら相対的に独自の発展傾向を備えるに至り、その外部の圧力から家族の構成員を守り、また (そのイデオロギー性は否定できないが) 女性を含めた人間の尊厳の広がりにも寄与することができたとする。しかしこの家父長制からの女性の解放の背後には、後期資本主義的な経済的生産力の開放 (Entfesselung) があり、近代社会そのものがいわば家族の成立とその崩壊をすでに内在させていたとアドルノはとらえる。「家族の崩壊はより大きな社会的傾向の表現であり、短期間の同時代的現象ではない」[GS 20-1, 305]。そしてアドルノは父なき現代社会における父親像の過剰補償として第三帝国期のヒトラーを位置づけながら、「おそらく家族は教育機能を十分果たすことはもはやできない。なぜなら、子どもが親のイメージへ真に同一化できるほどの内的な説得力が今の家族には欠けているからである」[GS 20-1, 307] という。この同一化が果たされないのであれば、そこからの葛藤を経た自立も不可能である。「実のところ、力に満ちた (kraftvoll) 家族とそれに劣らず強靱な (stark) 自我との葛藤は、今ではもう存在しない。両者の間には脆弱な (schwach) 空隙が開いている」[GS 20-1, 304]。

近代市民社会というごく限られた時代状況の中でのみ自我は成立しえたのであって、それも今や消え去ろうとしている——これは家庭教育にとどまらず歴史的・社会的な問題であり、また心理学の勃興と衰退とも連動している。アドルノの「社会学と心理学の関係について」によれば、「市民の時代以前の世界には心理学は存在しなかったが、全体的に社会化された世界 [近い将来] にも、やはり心理学は存在しない」[GS 8-1, 83]。心理学、より正確に言えば精神分析は、近代市民社会に見出された「欲動と禁止の無意識的な葛藤の舞台、すなわち相対的に自立したモノドロジー的な個人」[GS 8-1, 84] を対象としていた。この個人の核となったのが「葛藤の中間地帯 (Zone)」[GS 8-1, 84] としての自我であり、それは社会的適応の担い手として抑圧的な審級でもあり、しかし同時に抑圧に対峙する意識でもあった [GS 8-1, 81]。「自我の概念は弁証法的である。つまり心的であると同時に心的でもなく、リビドーの一部であると同時に世界を代表するものでもあるのだ」[GS 8-1, 70]。しかし歴史の政治的・経済的・文化的な帰結として、今やこ

の中間地帯は奪われつつあり、その象徴がファシズムであったとアドルノは分析する。自我形成の前提となるべき「個々人の心理の精神力動は、実際のところ、社会への適応に取って代わられている。この適応は意識的でもあり退行的でもある。〔中略〕現代にふさわしいのは、自我を喪失し、また本来の意味で無意識的に行為するわけでもなく、客観的な傾向をありのままに反映している〔パーソナリティの〕類型である。彼らは全員一緒に無意味な儀式に耐え、強制的な反復のリズムに従って動き、情緒が貧困になっている。つまり自我の崩壊とともに、ナルシズムとその集団的な派生物が高まるのである」〔GS 8-1, 83〕。その結果をアドルノは「自我に対するエスの勝利は、個人に対する社会の勝利と調和している」〔GS 8-1, 83〕、あるいは、自我という審級を欠いたままに「エスと超自我がひとつに結びついている」〔GS 8-1, 53〕と表現している²⁴⁾。

ところでこの論文でのアドルノは、自我を「弁証法的」に理解しているために、教育論のように「強靱な自我」を単純に要請することができないことに注意しておきたい。そもそも自我は「過大要求」を課されている。「自我はそれ自体の構造からして、二重の役割をあらかじめ組み込まれている。自我は常に現実の担い手でもあるため、自我は自我ならざるものでもある。自我はリビドー的欲求を代理するだけでなく、それとは不可分の現実の自己保存欲求をも代理せねばならない。そのような意味で、自我は過大要求を絶えず課され続ける。エスに対して自我は自らの堅固さと確実さ（Festigkeit und Sicherheit）を主張したが、しかし自我は決して堅固でも確実でもないのだ」〔GS 8-1, 71〕。それにもかかわらず「強靱な自我」を要請するならば、無意識の抑圧的な機能、それもあの強い防衛機制を招きかねない。「精神病患者において防衛は育まれるべきであり、神経症患者において防衛は克服されるべきである」というフロイト修正派の通説を「精神分析が修得したはずの神経症と精神病の原理的親和性を全く無視している」と批判しながら〔GS 8-1, 81〕、アドルノは次のように述べる。心理療法によって「精神分析が〔多様な内的諸衝動という〕諸々の抵抗を解消するならば、それは分析が自我を弱体化させたということである。〔中略〕それに対して自我を強化するというのは、〔修正派とは異なるフロイト自身の〕正統な理論によれば、自我がその根底に無意識を保持するための諸力を強化することであるが、同時に、無意識に対してその破壊的本質の駆動を許してしまう防衛機制を強化することでもあるのだ」〔GS 8-1, 82〕。——そして、これまで何度か言及してきた「意識化」については、この論文では初期フロイトを想定して「根本的にカタルシス的な方法は無意識の意識化を求める」としながら、それを「自我の解体」に位置づける〔GS 8-1,

81〕。ここでのアドルノは自我の脆弱さを評価しているように見える。

ここで表現されている自我の強化をめぐるアポリアは、アドルノのいうフロイトの根本的な問題、すなわち「抑圧と昇華の区別の困難さ」にも通じていよう〔GS 8-1, 73〕。自我の肯定的機能である昇華と否定的機能である抑圧を区別する基準をフロイトは提示できていないとアドルノは述べ、その代わりにフロイトは社会的有用性や社会的生産性の概念を外から導入したと批判する〔GS 8-1, 70〕。しかしこの導入をアドルノは否定しながら、むしろフロイトの理論のアポリアそのものをフロイトの偉大さとして捉えていた。アドルノが最初に精神分析を扱った論考「修正された精神分析（Die revidierte Psychoanalyse）」において、すでに次のように述べられている。「フロイトの偉大なところは、あらゆるラディカルな市民思想家と同様、この〔現実原則への適応をめぐるフロイトの両義的な態度のような〕矛盾を解決しないままに放置し、体系的な調和の要求を拒絶した点にある」〔GS 8-1, 40〕。しかし、このフロイトのアポリアはアドルノ自身のアポリアではないだろうか。

おわりに——「強靱な自我」の先へ

アドルノの教育論は、「強靱な自我」という近代市民的な自我モデルの復権を求めているようにも見える。確かにファシズム以降の世界の人々には「全体主義的性格」が認められ、その自我の脆弱さはアドルノにとって喫緊の問題であった。だが「強靱な自我」の基盤となりうる家族も現代は崩壊しつつあり、そもそも自我という概念構成それ自体が今や消え去りつつある近代市民社会の産物であったとアドルノ自身が認めている。ここに「自己の内的自然の支配による野蛮の将来」という『啓蒙の弁証法』のよく知られた主題を重ね合わせることで、アドルノ自身のアポリアはより明瞭になるだろう。ベンジャミン（Jessica Benjamin）が批判しているように〔Benjamin 1994〕、父親の権威の内面化を経由した自我の確立を、欲動という内的自然の支配の確立としてもとらえる限り、「近代資本主義に対する〔アドルノらの〕批判理論の中心には、支配に対する抵抗の本質にかかわるパラドックスが存在する。抵抗が依拠する意識——批判的理性、個人化、統合、そしてその終着点としての抵抗——という視点は、権威の内面化のプロセスと結びついている。すなわち、権威を拒否するためには、あらかじめそれを受け入れておかなければならないのだ。支配の主観的局面は、権威の内面化の途上に見出されるのだが、権威に対する抵抗の可能性は、内面化という同一の道筋にしか存在しないことになる。歴史的に言って、理性、反省、そして個人化が権威の内面化のプロセスと結

びついていたとすれば、ある意味、権威は必要で擁護されるという結論にならないだろうか [Benjamin 1994, 132]。ベンジャミンは、アドルノの家族の崩壊という現代への分析を尊重しながらも、彼のエディプス・コンプレックス観のような父権中心主義的な論理構成を批判し、アドルノの自我概念に代わるものとして相互主観性に可能性を見ようとする。

このベンジャミンの批判は、これまで教育論を中心に再構成してきたアドルノの自我形成観に関しては的を射たものといえよう。アドルノが権威の部分的な容認を避けることがなかったのは、すでに確認した通りである。しかしアドルノのエッセイや芸術論などを含めた思想全体を視野に入れた場合には、おそらく「強靱な自我」の形成という論理には回収されがたい展望が見えてくる。最後にその断片をいくつか確認しておこう。まず上述のように「自我の解体」を招くとされた「カタルシス的な方法」について、アドルノは『ミニマ・モラリア (Minima Moralia)』(1951年)の中で次のように述べてもいる。「[社会への] 適応の成功や経済的な結果を基準としていないカタルシス的な方法は、社会全体の不幸とそれと不可分な個々人の不幸とを人々に意識させねばならないだろう」 [GS 4, 69]。いうまでもなくアドルノはこの「カタルシス的な方法」を自らの社会批判を重ね合わせている。また「民主的リーダーシップと大衆操作」の中では、自己の内に宿る社会的強制と暴力に対する「意識化」のためには、フロイトを参照しながら「梃子の原理」が有効だと述べている。それによると偏見的な人は本能的衝動が強く [GS 20-2, 282]、また操りやすい人だとは思われたくないため [GS 20-2, 283]、自分の政治的決定が意識していない要因によって左右されることに気付いた時のショックが大きい [GS 20-2, 280]。そのショックが偏見を脱する契機となりうるとアドルノは期待を寄せるのである。これはすでに言及した『グループ実験』の一節「防衛それ自体が、人々の経験したショックの刻印であり、そこに希望の視点が開かれる」とも関連していよう。さらにアドルノの教育論で「意識化」とともに語られていた「自己省察」についても、たとえば『ミニマ・モラリア』の一節「試金 (Goldprobe)」で、哲学における自我の実体視を批判しながら次のように述べている。「幻惑されない自己省察においては、[中略] 幼少期の最初の意識的な経験においてすでにそうであったように、反省の対象となる心の動き (Regungen) が全く『真正 (echt)』なものではないことがそのつど明らかとなる。それには常に摸倣、遊戯、他のものでありたいという願望 (Andersseinwollen) が含まれているのである」 [GS 4, 174]。

「強靱な自我」という概念では測りきれないこうしたアドルノの思想は、美学的な議論においてより如実に

なっている。『文学ノート (Noten zur Literatur)』の第三巻(1965年)に収録された「諸前提 (Voraussetzungen)」(1960年講演)では次のように述べられている。「精神分析用語に従えば、解放された作品における表現と構成の関係はエスと自我のそれに類しているといえる。新しい芸術はフロイトとともに、エスのあるところに自我が成立しなければならないと語る。盲目的で、自分自身を衰弱させ、自然に囚われた関係を無限に繰り返す自然支配という罪責から自我が癒えるためには、内的自然であるエスを自我によって支配することでは果たせない。エスと和解し、エスの欲するところへ、意識的に、自由の立場から自我が随伴しなければならない。欲動を抑圧するのではなく、それを直視する者、欲動に暴力を加えたり、暴力としての欲動に屈服することなく、それを充足させる者こそ、正しい人間の名に値する。今日においては、正しい芸術作品の自由と必然性に対する模範的なあり方も、そのようなものでなければならない」 [GS 11, 444]。アドルノの自我概念は、とりわけそのレトリカルな用法も参照するなら、幼少期からの「強靱な自我」の形成によって確証されるわけではない。彼自身が対談などで時折言及していた自我をいかに形成するかという問題よりも、むしろ成人(だけでなくある程度成長した子どもも含めた人々)がどのように自己と向き合うのかという問題、そしてこの自己の深淵をさまざまに描き出すことに、アドルノの本領はあったのではないか。

そしてアドルノのいう「主体への転回」は、「意識化」や「自己省察」を通して垣間見える個人への期待でもあったように思われる。『ミニマ・モラリア』の「モノド (Monade)」という一節の冒頭では次のように述べられている。「個人が個人として結晶化されたのは、政治経済の諸形式、とりわけ都市の市場制度によるものである。個人は社会化の圧力に反対する場合であっても、個人は社会化の最も本来的な産物とその類似物を己にとどめている。社会に対する個人の抵抗を可能にするもの、独立性のあらゆる傾向は、性格というモノダ的な個別的関心とその沈殿物に端を発している」 [GS 4, 169]。さらに『ミニマ・モラリア』冒頭の「献辞 (Zueignung)」ではこうも述べられている。「ヘーゲルが構想していた時代に比べ、比較できないほど多くのことを、社会の分析は個人の経験から引き出せるようになってきている。[中略] 個人は一方では社会の社会化によって弱体化され、空洞化されているが、しかし豊かになり、洗練され、力を獲得してもいる。個人の崩壊の時代にありながら、個人自身の経験とその身に降りかかることの経験は、それでもある種の認識に貢献する。[中略] 差異の撤廃を直接的に意味あることだと考える全体的な風潮からしても、ここしばらくは、解放的な (befreiend) 社会の力のいくばくかは、[差異がなおも残っている] 個々人の

領域に収斂してきているとあってよいだろう」[GS 4, 16]。社会を駆動させてきた解放的な力は、かつては唯物論的な意味で社会的なものに宿っていたが、今や個人に収斂してきた。この無意識を含むモナド的な個人の解放的な力への期待が、「主体への転回」という言葉に担わされていたと考えられる。そしてこの個人が自らの深淵に宿す力とどのように関わるか——アドルノは「意識化」「自己省察」を担う自我の責務と教育の課題をここに認めていたのではないだろうか²⁵⁾。

注

- 1) 拙論「初期フランクフルト学派における精神分析と社会理論——ホルクハイマー、フロム、アドルノの思想的布置関係に焦点を当てて——」を参照されたい [白銀2014]。
- 2) 近年公刊された邦訳では本書のタイトルが『自律への教育』とされており、日本語での理解しやすさに配慮したものと思われるが、ドイツの教育学の先行研究では Mündigkeit が「成熟」ないし「成人性」と訳されることが多いため、ここでは「成人性」とした。
- 3) この講演を再び行うに当たって、アドルノが残した注意も全集には収録されている [GS 10-2, 816 f.]。
- 4) たとえばアンネ・フランクの日記の演劇を見て「あの娘だけは生かしておくべきだったのに」と語った女性の話をアドルノは紹介する。アドルノはこの女性の言葉を洞察の第一歩としては肯定するものの、しかし「あの娘だけ」という個人のレベルにとどまることで、かえってユダヤ人問題全体への視点を覆い隠すことを憂慮している。
- 5) この言葉はたとえば邦訳『自律への教育』では「主体への向け直し」、また『批判的モデル集 I —— 介入 ——』では「主体を目指す方向転換」と訳されており、いずれも日本語として読みやすいものとなっているが、本論ではいわゆる「コペルニクスの転回 (Kopernikanische Wendung)」に準じて「主体への転回」と訳すこととした。社会的病理の責任を社会に帰すことで自分の問題として引き受けないことや、その問題への対処を——たとえば唯物史観的に——社会変革に求めることを避け、アドルノはコペルニクスとカントを想定しつつ根本的な「転回」を求めたと考えられるからである。
- 6) 以下のものを主に参照した。Wiggershaus 2001、ジェイ1975、古松2014。
- 7) このプロジェクトは1943年のホルクハイマーの講演によると、ポロックとコロンビア大学のマッキーヴァー (Robert MacIver) が反ユダヤ主義の経済的・社会的原因の分析を指揮し、アドルノとホルクハイマーが心理学的な研究部門を指揮するとされた [HGS 12, 168]。
- 8) AHB II, S. 608ff 参照。これはツィーゲによると [Ziege 2009]、社会心理学的というよりも政治学的な研究であるが、『啓蒙の弁証法』と『権威主義的パーソナリティ』の間をつなぐ重要な研究として位置づけられるという。なおこの研究結果は出版されなかったが、それはアメリカの労働者の大部分が反ユダヤ主義的だとした調査結果によるところが大きかったといわれる [ジェイ1975, 329]。
- 9) 「フレンケル＝ブルンスヴィク」という名前の表記は、

- ドイツ語圏からの亡命者という背景をふまえてドイツ語の発音に基づいた。
- 10) 当時アメリカで講演されたその内容は、後に「修正された精神分析 (Die revidierte Psychoanalyse)」(1946年の講演が1952年に英語で公刊、独語訳は1962年)として公になった。
 - 11) この時期の研究成果といえるテレビ研究としては「テレビジョン序説 (Prolog zum Fernsehen)」(1953年)、「イデオロギーとしてのテレビジョン (Fernsehen als Ideologie)」(1953年)、「悲観主義者が答える (Der Schwartzseher antwortet)」(1954年)、ホロスコープ研究としては「地上に墜ちた星 (The Stars Down to Earth)」(1952/53年)、「二番煎じの迷信 (Aberglaube aus zweiter Hand)」(1959年)が挙げられよう。
 - 12) 日本の教育学においてこの論文を扱ったものとしては今井康雄『『過去の克服』と教育——アドルノの場合』が挙げられる [今井 2011]。
 - 13) この部分の執筆者は本自体には明記されていないが、アドルノのホルクハイマーへの書簡によれば、アドルノとホルクハイマーの連名の「序言 (Vorwort)」と同様、大幅にアドルノの手が入っていると考えられる [AHB IV, 276 f.]。
 - 14) 「過去の克服とは何か」を始めるにあたってアドルノはこの言葉を自ら引用しながら、この講演は「ルサンチマンを抱いていると思われる」としても、「絞首刑吏の家で」あえて「縄の話をす」ものだと暗に位置づけている [GS 10-2, 555]。
 - 15) 「ドイツ人である」という出生そのものによってナチの責は負わされるべきではないとアドルノが考えていたことの傍証として、たとえば「ドイツ的とは何かという問いについて (Auf die Frage: Was ist deutsch)」(1965年)を挙げることができよう。アドルノが「ドイツ的」という言葉の理想化に警戒しながら亡命先からの帰国を選んだ彼自身の動機を語ったことで知られるこの論文では、「社会的に思考する人、特にファシズムを社会的・経済的に把握する人は、『民族としてのドイツ人に責任はある』というテーゼとは無縁である」と述べている [GS 10-2, 696]。
 - 16) ここでは著者4人の名前が連記された第7章「潜在的な反民主主義的傾向の測定」を主に参照するが、ヴィーガースハウスによると [Wiggershaus 2001, 457 ff.]、この部分はサンフォードが主に手掛けており、フレンケル＝ブルンスヴィクは自分の名前がここに挙がるのに難色を示していた。他方でアドルノはF尺度の開発において自分の果たした役割が大きいと自認しており、またアドルノ自身の担当した部分ともその内容に齟齬はないように思われる。
 - 17) F尺度は反ユダヤ主義尺度 (anti-Semitism scale : A-S 尺度)、自集団中心主義尺度 (ethnocentrism scale : E 尺度)、政治経済的保守主義尺度 (politico-economic conservatism scale : PEC 尺度)を用いた予備調査を経て、特にA-S尺度とE尺度を発展させて作成された。さらにこの調査を基礎に選ばれた被験者に対して、面接調査と主題統覚検査が行われた。
 - 18) なお、ここではスケープゴートと権威主義的攻撃との差異にも言及されている。アドルノらが理解するスケープゴートとは、主に経済的な欲求不満に原因があるにもかかわらず、知的混同 (confusion) によって欲求不満の原因を見誤った人が、反撃される可能性の低いマイノリ

- ティに対して衝動を放出することである。それに対して転移の理論は、知的混同という説明に甘んじることなく、内集団の権威への攻撃ができないことを強調する理論であり、あわせて道徳的な攻撃の正当化や攻撃の過度の暴力性を説明できる点で有効だとアドルノらは述べている [GS 9-1, 200 f.]。
- 19) この「結論」部分は担当著者が明記されておらず、アドルノ全集にも、またアドルノの担当部分のドイツ語訳にも収録されていない。
- 20) アドルノ個人が担当した部分でこの言葉はほとんど用いられておらず、第18章「面接資料を通して明らかにされる宗教的イデオロギーのいくつかの視点」において、宗教性の低得点者の中で、「ある主体が一般的な文化的状況の下で意識的に非宗教的であることは、ある種の自我の強韌さの現れを示している」[GS9-1, 448] といった言及がなされている程度である。
- 21) フレンケル＝ブルンスヴィクが担当したこの部分の章のタイトルは以下の通りである。
- 第9章 偏見を持ったパーソナリティへのアプローチのひとつである面接
 - 第10章 面接を通して観察された親と幼年期
 - 第11章 面接を通して観察された性と民衆と自己
 - 第12章 面接を通して観察された力動的パーソナリティ組織と認知的パーソナリティ組織
 - 第13章 包括的な得点と面接結果の要約
- 22) 学校での反ユダヤ主義の萌芽にアドルノが早くから注目していた例として、たとえば1943年の「反ユダヤ主義について (ad Antisemitismus)」を挙げることができよう。ホルクハイマーに送られ、高く彼に評価されたこの草稿でアドルノは自分の生徒時代を振り返りながら、首席だったアドルノを追い落とそうとするクラスメイトたちの共謀を描いていた [AHB III 441 ff.]。
- 23) この点に該当するフレンケル＝ブルンスヴィクの調査結果として、第11章「面接を通して観察された性、民衆、自己」の中の「幼年期の自己に対する理解」で示された結果を挙げることができるだろう。たとえば偏見の高得点者は「厄介な (difficult)」[AP, 437] 子どもだったが幸福だったと回想する傾向にあった [AP, 438]。他方で低得点者は内気で自意識が過剰であり [AP, 438]、労働・読書・大人の諸価値を志向していたと自分の子ども時代を回想する傾向がみられたという [AP, 441]。
- ただし、この議論はむしろアドルノ自身の生徒時代の記憶によるところが大きいように思われる。『ミニマ・モラリア』第三部の一節「意地悪な同級生 (Der böse Kamerad)」(1935年執筆)は「ファシズムは私にとって子ども時代の記憶から導き出せる必然の結果だった」という言葉から始まり、独りであることの好きだった自分をいじめた同級生たちにファシズムの原像を重ね合わせながら、自分の繰り返し見た悪夢をアドルノは語る。そして授業を妨害し続けていた生徒が、アビトゥーアが終わったその時から反抗していた教師とテーブルを囲みビールを傾けて男同士の盟約を交わす姿を、第三帝国の追従者と形容する。亡命先で記されたこのエッセイは次の言葉で終わっている。「[第三帝国で] 権限を握る者となり死地を志願する彼らが、夢の中から現れてかつての私の生と言葉を奪って以降、私はもう彼らの夢を見る必要がなくなった。子ども時代の悪夢はファシズムにおいて現実となったのだから」[GS 4, 220]。
- 24) この状態をジジエクは (おそらくマルクーゼ (Herbert

- Marcuse) に依拠して「抑圧的脱昇華 (repressive desublimation)」と形容している [ジジエク 1996, 33]。
- 25) この主題については改めて論じる必要があるが、その断片のいくつかを描いたものとして拙論を挙げておきたい [白銀 2002, 白銀 2003]。またアドルノの求める自我のあり方が、精神分析的にどのように解釈されるかについては、さまざまな議論がある。たとえばジジエクは、アドルノと「意識化」の概念において多くを共有するハーバーマスを批判している [ジジエク 1996]。ジジエクによれば、ハーバーマスは相互主観的コミュニケーションの言語による無意識の意識化を提唱するが、それは自己疎外の解消という疑似ヘーゲル主義であり、(ジジエク自身のラカン派的な立場から) 根本的な「主体の原因」となる無意識レベルの「主観化—シンボル化に抵抗する残余」を等閑視するものだとして批判し [ジジエク 1996, 52]、意識の非同一次性にも関心を寄せたアドルノのほうを評価している。他方でホワイトブックは、「自己の非強制的な統合という概念は、全面的な解消と離散に対するポストモダニズムのもつ躁的で一面的な祝福を迎え撃つために必要であるだけでなく、批判理論にとってぜひ必要なものでもある」として [ホワイトブック 1997, 291]、アドルノの人間形成観を——時にアドルノ自身の言葉に反しながら——自我の統合という観点から再評価しようとする。無意識の解放と自我の統合、その間にアドルノの議論をどのように位置づけることができるか、今後の課題としたい。

主要参考文献

〈一次文献〉

- AHB: Theodor Wiesengrund Adorno und Max Horkheimer Briefwechsel. 4 Bde. Gödde, Ch., u. Loniz, H. (Hrsg.), Frankfurt am Main 2003.
- Adorno, Th. W.: Nationalsozialismus und Antisemitismus. In Bd. II, S. 539 ff.
 - Adorno, T. W.: Research Project on Social Discrimination. In Bd. II, S. 623 ff.
 - Adorno, Th. W.: ad Antisemitismus. In Bd. III, S. 441 ff.
 - Horkheimer, M.: American Jewish Committee Progress Report of the Scientific Department. In Bd. III, S. 495 ff.
 - Adorno, Th. W.: Über die psychoanalytische Praxis. In Bd. IV, S. 876 ff.
- AP: Adorno, T. W., Frenkel-Brunswik, E., Levinson, D. J., Sanford, R. N.: The Authoritarian Personality, New York 1969. (アドルノ (1980) 『権威主義的パーソナリティ』 田中義久・矢沢修次郎・小林修一訳、青木書店。)
- EzM: Adorno, Th. W.: Erziehung zur Mündigkeit. Vorträge und Gespräche mit Hellmut Becker 1959-1969. Kadelbach, G. (Hrsg.), Frankfurt am Main 1971. (アドルノ『自律への教育』原千史・小田智敏・柿木伸之訳、中央公論新社。)
- Adorno, Th. W. und Becker, H.: Erziehung zur Entbarbarisierung. S. 120 ff. (アドルノ (2011a) 「野蛮から脱するための教育」、アドルノ『自律への教育』167-185頁。)
 - Adorno, Th. W. und Becker, H.: Erziehung zur Mündigkeit. S. 133 ff. (アドルノ (2011b) 「自律への教育」、アドルノ『自律への教育』187-208頁。)
- GS: Theodor Wiesengrund Adorno Gesammelte Schriften. 20 Bde. Tiedemann, R., Adorno, G., Buck-Morss, S., Schultz,

- K. (Hrsg.), Frankfurt am Main 1971-86.
- Der Begriff des Unbewusstseins in der transzendentalen Seelenlehre. In Bd. 1, S. 79 ff.
 - Max Horkheimer und Theodor W. Adorno: Dialektik der Aufklärung. Philosophische Fragmente. In Bd. 3, S. 1 ff. (ホルクハイマー・アドルノ (1990)『啓蒙の弁証法——哲学的断想』徳永恂訳、岩波書店。)
 - Minima Moralia. Reflexionen aus dem beschädigten Leben. In Bd. 4, S. 1 ff. (アドルノ (1979)『ミニマ・モラリア——傷ついた生活裡の省察』三光長治訳、法政大学出版局。)
 - Die revidierte Psychoanalyse. In Bd. 8, S. 20 ff. (アドルノ「修正された精神分析」三光長治訳、アドルノ (2012)『ゾチオロギカ——フランクフルト学派の社会学論集』三光長治・市村仁・藤野寛訳、平凡社、2012年、92-118頁。)
 - Zum Verhältnis von Soziologie und Psychologie. In Bd. 8, S. 42 ff.
 - Adorno, T. W., Lowenthal, L., Massing, P. W.: Anti-Semitism and Fascist Propaganda. In Bd. 8, S. 397 ff.
 - Bemerkungen über Politik und Neurose. In Bd. 8, S. 434 ff.
 - Freudian Theory and the Pattern of Fascist Propaganda. In Bd. 8, S. 406 ff.
 - The Psychological Technique of Martin Luther Thomas' Radio Addresses. In Bd. 9-1, S. 9 ff.
 - Studies in the Authoritarian Personality. In Bd. 9-1, S. 144 ff. (アドルノ (1980)『権威主義的パーソナリティ』)
 - Schuld und Abwehr. Eine qualitative Analyse zum Gruppenexperiment. In Bd. 9-2, S. 121 ff.
 - Max Horkheimer und Theodor W. Adorno: Vorurteil und Charakter. In Bd. 9-2, S. 360 ff.
 - Starrheit und Integration. In Bd. 9-2, S. 374 ff.
 - Replik zu Peter R. Hofstätters Kritik des Gruppenexperiments. In Bd. 9-2, S. 378 ff.
 - Was bedeutet: Aufarbeitung der Vergangenheit. In Bd. 10-2, S. 555 ff. (アドルノ (1971a)「過去の清算が意味するところ」、アドルノ『批判的モデル集 I——介入』大久保健治訳、法政大学出版局、157-184頁。アドルノ (2011c)「過去の総括とは何を意味するのか」、アドルノ『自律への教育』9-36頁。)
 - Erziehung nach Auschwitz. In Bd. 10-2, S. 674 ff. (アドルノ (1971b)「アウシュヴィッツ以後の教育」、『批判的モデル集 II——見出し語』110-133頁。アドルノ (2011d)「アウシュヴィッツ以後の教育」、アドルノ『自律への教育』124-146頁。)
 - Auf die Frage: Was ist deutsch. In Bd. 10-2, S. 691 ff. (アドルノ (1971c)「ドイツ的とは何かという問いに答えて」、アドルノ『批判的モデル集 II——見出し語』134-148頁。)
 - Wissenschaftliche Erfahrungen in Amerika. In Bd. 10-2, S. 702 ff. (アドルノ (1971d)「アメリカにおける学問上の諸経験」、アドルノ『批判的モデル集 II——見出し語』大久保健治訳、法政大学出版局、149-198頁。)
 - Voraussetzungen. In Bd. 11, S. 431 ff. (アドルノ (2009)「諸前提——ハンス・G・ヘルムスの朗読会に際して」三光長治訳、アドルノ『文学ノート 2』三光長治・高木昌史・圓子修平・恒川隆男・竹峰義和・前田良三・杉橋陽一訳、みすず書房、142-161頁。)
 - Democratic Leadership and Mass Manipulation. In Bd. 20-1, S. 267 ff.
 - Zum Problem der Familie. In Bd. 20-1, S. 302 ff.
 - Max Horkheimer und Theodor W. Adorno: Freud in der Gegenwart. Ein Vortragszyklus der Universitäten Frankfurt und Heidelberg zum hundertsten Geburtstag. Mit Beiträgen von Franz Alexander u. a. Frankfurt am Main. 1957. In Bd. 20-2, S. 646 ff.
- HGS: Max Horkheimer Gesammelte Schriften. 19 Bde, Schmidt, A. u. Schmid Noerr, G. (Hrsg.), Frankfurt am Main 1985-1996.
- Plan des Forschungsprojekts über Antisemitismus. In Bd. 12, S. 165 ff.
- Theodor W. Adorno: Studien zum autoritären Charakter. Mit Vorrede von Ludwig von Friedeburg. Übersetzt von Weinbrenner, M. (8. Auflage), Frankfurt am Main 2013.
- ZfS: Zeitschrift für Sozialforschung 1932-1941, 9 Jgg., München 1980.
- Institute of Social Research: Research Project on Antisemitism. In IX Jg. ("Studies in Philosophy and Social Science") Heft 1, S. 124 ff.
- 〈二次文献〉
- 今井康雄 (2011)「『過去の克服』と教育——アドルノの場合」対馬達雄編『ドイツ 過去の克服と人間形成』昭和堂、157-204頁。
 - ジェイ (1975)『弁証法的想像力——フランクフルト学派と社会研究所の歴史1923-1950』荒川幾男訳、みすず書房。
 - シエママ (1995)『精神分析事典』小出浩之・加藤敏・新宮一成・鈴木國文・小川豊昭ほか訳、弘文堂。
 - ジジック (1996)『快樂の転移』松浦俊輔・小野木明恵訳、青土社。
 - 白銀夏樹 (2002)「アドルノの Bildung 概念における時間の位相について——美的経験の瞬間と歴史の問題を中心に」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 (教育人間科学領域)』第50号、71-76頁。
 - 白銀夏樹 (2003)「人間形成における時間的連続性に関する一考察——時間意識をめぐるアドルノの思想を手がかりとして」教育思想史学会『近代教育フォーラム』第12号、211-223頁。
 - 白銀夏樹 (2014)「初期フランクフルト学派における精神分析と社会理論——ホルクハイマー、フロム、アドルノの思想的布置関係に焦点を当てて」関西学院大学教職教育研究センター『教職教育研究』第19号、51-70頁。
 - 古松文周 (2014)『フランクフルト学派と反ユダヤ主義』ナカニシヤ出版。
 - ホワイトブック (1997)『倒錯とユートピア』桑子敏雄・鈴木美佐子訳、青土社。
 - Benjamin, J. (1994): The End of Internalization. Adorno's Social Psychology. In: Bernstein, J. (Ed.) The Frankfurt School: Critical Assessments. vol. 3, Section 4: Theodor Adorno. New York 1994, pp. 132-153.
 - Demirović, A. (1999): Der nonkonformistische Intellektuelle. Die Entwicklung der Kritischen Theorie zur Frankfurter Schule, Frankfurt am Main. (デミロヴィッチ (2009)『非体制順応的知識人——批判理論のフランクフルト学派への発展 (第一分冊) 戦後ドイツの「社会学」とフランクフルト学派』仲正昌樹監訳、太寿堂真・

高安啓介・福野明子・竹峰義和・松井賢太郎・安井正寛
訳、御茶ノ水書房。)

- Horkheimer, M., Fromm, E., Marcuse, H. u.a. (1987): Studien über Autorität und Familie. Forschungsberichte aus dem Institut für Sozialforschung (2. Auflage), Lüneburg.
- Perrin, A. J./ Olick, J. K. (2011): Translators' Introduction. In: Pollock, F., Adorno, T. W. and others: Group Experiment and Other Writings. The Frankfurt School on Public Opinion in Postwar Germany. Translated by Perrin, A. J. / Olick, J. K., Cambridge- London, pp. xi-lxi.
- Wiggershaus, R. (2001): Die Frankfurter Schule. Geschichte - Theoretische Entwicklung - Politische Bedeutung (6. Auflage), München.
- Ziege, E.-M. (2009): Antisemitismus und Gesellschaftstheorie. Die Frankfurter Schule im amerikanischen Exil, Frankfurt am Main.

※訳語については、精神分析用語をはじめとした訳語の統一をはかるため、一次文献から筆者が訳したが、既刊の邦訳のあるものは適宜参照した。なお精神分析用語の訳語は主にシエママ編『精神分析事典』に依拠した〔シエママ 1995〕。

※本研究は JSPS 科研費25780497の助成を受けたものである。

(しろかね なつき・関西学院大学准教授)